



『生きるための農業 地域をつくる農業』

菅野芳秀 著

大正大学出版会 刊

定価 1,980円 (本体 1,800円+税)

笑顔がステキな身長190cmの菅野さんに会ったのは、新東京国際空港建設反対運動が激しさを増し、土埃が舞う早春の「三里塚」だったように思う。「前田のじいさん」と呼ばれ、『瓢鰻亭通信』で知られる前田俊彦さんの「闘争小屋」ではなかったか。前田さんは敗戦後の福岡県で村長を務め、後年に公然と密造酒(どぶろく)を造って勇名をはせた。

菅野さんはその後、山形県に25歳で帰郷し、「一度は逃げ出したいと思った田舎を、逃げなくてもいい、いつまでもそこで暮らしたいと思える地域に変えていこうとする。(中略)村に帰って来た時には『過激派だったそうだ』との評判が地域の中にあふれており、地域づくりの道を歩むには初めから厳しく、刺激的な空気に満ちていた」。彼が地域の「異端者」として歩み出したころ、農業は政府

による強権的な米の生産調整に直面していた。菅野さんは「長井市内で一人だけ国や農協の方針に逆らい」「地域に同調しない男」と見られた。

あれから50年余。「生きるための農業 地域をつくる農業」に悪戦苦闘してきた軌跡を綴る。「菅野農園」はいま「水田が5ha。大豆畑が3ha。それに玉子を得るための放し飼いの自然養鶏を1000羽」経営し、40代前半の後継者が担っている。

菅野さんが長年にわたり先導してきた「台所と農業をつなぐながい計画」(レインボープラン)は、長井市の循環型地域づくり事業の根幹となり、全国に知られている。そんな彼を支えたのは、四季に彩られた農業や置賜地方の美しい風光だった。絶滅危惧種に追い込まれている農業・農村で「いま何が起きているのか」「みんなで農業の話をしようよ」と問いかけ、呼びかける菅野さんの豊かで温かな心がストレートに伝わってくる。

さんかいのげん
(山海野 玄)